十人十色　七日七色

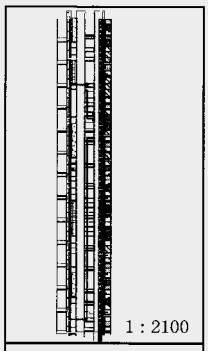
［毎日違ったニュアンスのある集合施設］

この集合施設には単身や二世帯、また学生から老人で、多様な人物が入り交じり暮らしている。中でも、今回、ごく普通の一人の男に注目してみることにした。

職業：公務員
年令：42
性別：男
扶養：妻　38
　　子　14

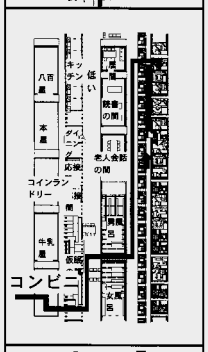
「都会の冷たさに疲れた、しかし、田舎へは帰りたくない」そんな思いで彼らもまた3年前ここに移ってきた。会いたい時に会う、そんな自由なコミュニケーションを求めていた…

彼は大のスポーツ好きで、その日の朝も出勤前にマラソンをしていた。



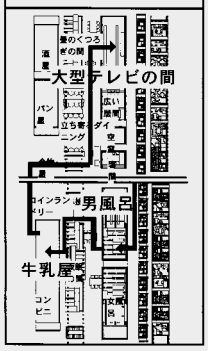
MON

マラソンをしていると、同じようにウォーキングをしていた3軒、4軒隣りの老夫婦に会った。娘さんに子供が生まれたらしい。その日は、よく晴れたとても気持ちのいい朝だった。



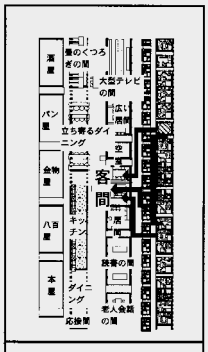
TUE

その日は、仕事でミスをし、彼は落ち込んでいた。誰にも会いたくなくコンビニで飯を買って一人部屋で食べた後、屋上で黄昏れていた。すると、風呂上がりの若い女性と目があい、挨拶をした。



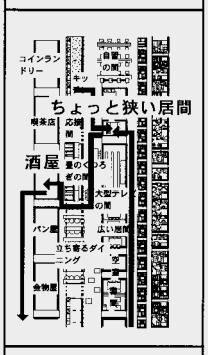
WED

昨日の事は忘れて、今晩は、仕事から帰るとすぐに大浴場に行き、その後、大型テレビの間で地域のサッカー好きの人たちと観戦を楽しんだ。もちろん風呂上がりの牛乳をもって…



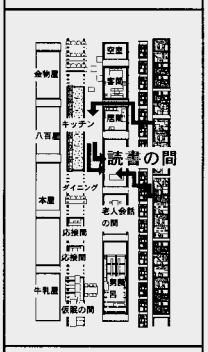
THU

その日は、子供が生まれた6軒隣りの娘さんのたに、みんなで増壁を手伝った。その後広い居間で自分の家族も一緒に夕食を楽しだ。



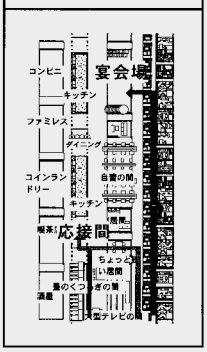
FRI

仕事から帰ると、子供から今日は泊まってくると連絡があり、久しぶりに夫婦だけで狭い居間に行き食事をした後、ビールとワインを酒屋で買って、彼の部屋で二人で飲んだ。



SAT

昼に、たばこを買いに出ると、キャッチボールをしている息子達を見かけた。勉強を教えてくれと頼まれたので読書の部屋に行ってみと、すでに、老人が別の子供達と、楽しそうに話してた。老人の生きがいは子供だなと思った。



SUN

10時頃客が来て応接間に行った。パーティーの話だった。
夕方、2軒隣りの老人を誘い、出産パーティーに出席するために宴会場に向かった。

こうしてまた、違った一週間を迎える……

布施　裕二

設計演習Ⅱ

課題
プログラムの変容と再構築

4年

担当：
関澤　勝一

布施　裕二

以前のマイホームの考えは、閉鎖計画で「住戸と都市」「個人と都市」を遠ざけてしまった。ここでは以前の我が家の要素を分離させ、各要素と通り（屋根のない部屋）を直接結ぶことによって公共空間の中に個人空間が存在し、自由に各要素に立ち寄ることが可能である。家に住むのではなく、街に暮らす。個人個人の生活の流れに必要な要素を自由に選びながら暮らす。毎日違ったニュアンスの部屋で、違ったコミュニティーのある刺激的な生活があり、豊かな人間関係が期待される。

指導＝関澤　勝一

私が毎日通る東海道線大船駅にも、立派な駅ビルがJRと湘南モノレールを結ぶコンコースに面して建てられている。このコンコースには夜遅くなるとダンボールを敷き、囲いをつくって一夜を明かす人々がいる。時には二人で一つの囲いの中に肩を寄せ合って寝ている。この風景は、今ではめずらしいものではない。誰も特別に興味を示さず、チラリと横目で見て足早に通り過ぎる。
布施君の作品をみて、私は「Homeless House」ということばをつくりたくなる。家庭のない「住まい」。彼の作品は概念としては近代家族と近代住宅はお互いに別々のものであり、核家族（Nuclear family）とnLDK型（この表示方法は純日本式表示である！）は別々に存在することを主張しているように見える。社会と住居との相互関係の変化を認め、その関係をリストラ（restructuringの日本式略語）しようとしている。この作品は彼の概念をコンセプト・ダイアグラム（概念図）として示したものであり、これをもとにARCHITECTUREを造り出すこと、つまり建築デザインをすることが布施君に課せられたテーマである。